

中央復建コン
サルタコン

兼塚 卓也 社長



生産性と生産力を強化

中期経営計画の2年目となる今期は「この10数年来となる受注量を確保できた初年度と同様に今期も好調だ」と思惑どおりに進んでいる業績に手ごたえを感じている。

好調の背景として「国の予算が横ばいだが安定し、自治体関係もそれなりの発注量で推移している。特に近畿では、整備新幹線やリニア中央新幹線、私鉄

の連続立体交差事業など鉄道関係や道路橋梁の分野で例年より発注量が多く、受注に結びつけることができた」と振り返る。

来年度以降の見通しについては市場に大きな変化はないと見つつ「受注した業務の評価点を少しでも上げる努力をし、1件でも多く表彰を受けたい。その成果が次年度以降の技術競争にも大きく影響するので良い循環

を続けていきたい」と語る。

より競争力を高めるための業務体制として「生産性」「生産力」の両面の強化を打ち出していく。「生産力を強化するため

受注量を増やすだけではなく、同時に仕事の効率化も進める」考えだ。効率化の視点としては「業務のスタート段階でクライアントと十分にコミュニケーションをとり、方向性を定めた上で手戻りのない仕事をするのが重要」と力説する。

今後の注目市場となる維持管理分野については拡充する戦略をとる。昨年、大阪本社内に横

断的な組織「社会インフラマネジメントセンター」を設置、9

月にはアセットマネジメントシステムの国際規格「ISO 55001」の認証も取得した。「特に道路、河川、港湾の維持管理の仕事が増えてくるはず。この動きにきっちり対応できる

体制と個々の技術力を高めることに力を注ぎたい。ISOの認証取得は、会社の方針を示すことで技術者の意識を変えたい思いもあった」と言う。

建設業の生産性革命の動きで重要な役割を果たすCIMは、以前から3次元での設計体制を組んでおり、成果品にも自信を持っている。施工や維持管理の各段階までを一貫するプロジェクトに関わっていくことを想定しながら、変化に対応できるようにしたい」と意欲的だ。

働き方改革については「継続して取り組んでいるが、業務工程を管理しながら残業時間を含めた意識の徹底を図っている。同時に生産性を上げるといいうミッションを遂行することは大変だが、逆算して段取りを組むなど、良い効果も生まれている」と話す。